

全国子育てひろば実践交流セミナー in みやぎ  
ありがとう 出会い つながり 咲かせよう 未来のひろば



〈開催概要〉

- 開催日時：平成27年11月7日（土）13:00～17:00  
8日（日） 9:30～12:00
- 会場：（7日）仙台サンプラザ（クリスタルルーム）  
（8日）仙台市市民活動サポートセンター（研修室5，セミナーホール）  
仙台サンプラザ（ローズ・パール・青葉・カトレア）
- 主催：NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援：宮城県・仙台市・石巻市・名取市・（社福）全国社会福祉協議会
- 運営協力：全国子育てひろば実践交流セミナー in みやぎ実行委員会
- 参加人数：①参加者合計：367名
  - 1日目参加者 264名（1日目のみ参加者 46名）
  - 2日目参加者 321名（2日目のみ参加者 103名）
  - 第1分科会 34名 第2分科会 54名 第3分科会 74名
  - 第4分科会 72名 第5分科会 55名 第6分科会 32名
  - 両日参加者 218名
  - のべ 585名
- ②交流会：約150名
- ③視察：合計93名
  - 石巻 40名 名取 53名

〈1日目 全体会プログラム〉

■開会挨拶

伊藤任佐子さん（全国子育てひろば実践交流セミナー in みやぎ実行委員長）



■来賓挨拶

村井嘉浩 宮城県知事（代読：宮城県保健福祉部長 伊東昭代さん）

奥山恵美子 仙台市長（代読：仙台市副市長 藤本章さん）



伊東昭代さん



藤本章さん

## ■行政説明

### 地域子育て支援拠点の役割と展望 子ども・子育て支援新制度について

【講師】野村知司さん（厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化総合対策室 室長）

#### I. 地域子育て支援拠点事業の概要

4つの基本事業とは…

- ①子育て親子の交流の場の提供と交流の促進
- ②子育て等に関する相談、援助の実施
- ③地域の子育て関連情報の提供
- ④子育ておよび子育て支援に関する講習等の実施

基本事業の内容は、ひと昔前までは地域（隣近所）で自然に行われていた。

時代の変化に伴い失われてきたが、やはりなくてはならないものであり、意図的に仕組んだ支援が必要になってきた。4つの基本事業を大事にしながら、親子と支援者の双方向で高めあっていくのが理想である。



#### II. 子ども・子育て支援新制度の概要と地域子育て支援拠点事業の今後の課題

- ・子ども・子育て支援新制度への対応としては、地域子ども・子育て支援事業として、しっかりと市町村子ども・子育て支援事業計画に位置づけてもらい、住民の理解を得ながら拡充していくことが必要。
- ・利用者支援事業（基本型）の展開  
日頃から地域の親子と関係を構築していて敷居の低い地域子育て支援拠点での利用者支援事業の実施について普及していきたい。そのためには支援拠点として様々な子育てのニーズに寄り添い支援を行いながら、把握された子育て家庭のニーズを市町村や関係者に対して提示し現状や提案を伝えていくことによって、支援拠点と利用者支援を併せて実施することによる相乗効果を分かってもらうことが大切。しかし、理解を得るまでには時間を要することもあるので、日頃から市町村等と顔の見える関係を築き、具体的な提案を行いながら、そのニーズが持つ意味合いも伝えられるとよい。
- ・利用者支援事業のガイドラインについて  
現在、支援を行っている支援者や運営者が、日々行っている支援を振り返り、磨き上げていきながら様々な事象を乗り越えていくための指針として、このガイドラインを活用してほしい。現場での実践を通じてこのガイドラインにも更なる改善が必要になるかもしれない。
- ・子育て世代包括支援センター  
地域で様々な事業が展開される中で、いろいろな支援者をニーズに合うようにコーディネートしていくのが包括支援センターの役割である。それぞれの支援者で情報を共有し、連携しながら切れ目のない支援体制が広がっていくのが望ましい。



## ■基調講演

### 被災地に学ぶ 子ども・子育て家庭の現状と求められる支援

【講師】本間博彰さん（宮城県子ども総合センター 所長）



#### ◇災害と家族

震災によって心に傷を負った子どもたちがたくさんいる。その子どもたちを育てている大人も様々な思いを抱えながら生きているが、自分達の生活の大変さのために子どもが必要としているケアを十分に出来ないでいる。そのことが虐待や年齢が上がっても落ち着きのない子どもが増加している一因として考えられる。

#### ◇災害と子どもの心の問題

心に負った傷は時間の経過とともに薄れていく一方で、時間が経ってから新たに発生する傷（問題）もでてくる。様々な困難や不安の中で生きている子どもは、前向きな考えを持ったり、積極的に取り組むことができなくなる。常に周りの状況を気にしながら生きなければならない子どもは、自分自身の問題（気持ち）に気付けないでいる。

#### ◇子どもの発達と家族の役割について

よりよい育児を支えるためには親を支援することが大事である。親は自分がケアされた体験を持つと、子どもに関わりが持てるようになる。安心感を持てる子どもは活動的になる。

2つの主要な側面としては、子どもが十分甘えられる機会、かなりの程度の依存を受け入れてもらう機会が絶えずあること。そして、その依存があったことで、自信をもって両親から家庭へ、家庭のすぐ外の社会へ、その更なる次の社会へと押し出す機会を提供することができる。このことが家族の役割でもある。

#### ◇子ども・親が安心して自らの能力を発揮できるように

ある程度の安全安心が確保されている環境のもとで、大人の困惑や不安定さが子どもに影響することを軽減し、自分の不安や怒りなどの感情を自分なりにコントロールできるようにしていく。そのためにも、安心できる他者（支援者）との関わりや、ここぞという時に自分の語りたい事をしっかりと聞いてもらえ、考えや感情を尊重してもらえる居場所が大事である。



## ■パネルディスカッション

### 子育て家庭、地域とともに深化する子育てひろば

～ありがとう 出会い つながり 咲かせよう 未来のひろば～

【コーディネーター】 渡辺 顕一郎さん（日本福祉大学 教授）

【パネリスト】 山崎 美貴子さん（神奈川県立保健福祉大学 名誉教授）

伊藤 仟佐子さん（NPO 法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク 代表理事）

奥山 千鶴子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長）

#### ◇パネリスト：山崎 美貴子さん 『地域における子育て支援』

もともと子育ての主役は家族と地域であったが、育児の方法を身に付ける場がなくなってきたため、子育て支援の目標として「身に付ける場」を作ることから始まった。明治・大正時代は三世代家族（拡大家族）、1960年代は祖父母とは別の家族を作る核家族化（近代家族）、2000年代近くからは現代家族へと移行してきた。現代のコミュニケーションツールはポケットの中であり、家族や友人とのやり取りに電子機器を使うなど、家族・子育ての環境に大きな変化が見られる。子育て家族が直面する課題を見つめなおし、共働き家族の増加や、配慮を必要とする子どもの子育てなど、多様な家族が登場する時代状況の中で、子育て家族を支援するために、子どもと家族を支える地域づくりが必要。そこで、地域の自治体と顔の見える関係性・つながりを大切にし、自治体がどのように保育所、幼稚園、認定こども園、地域子ども・子育て支援、独自の子育て支援などに取り組む方向性なのか見定めつつ、市民も参加し子ども・子育て会議を行い、それぞれの特性を活かして地域の中で共生社会を創っていくことが大切である。家族の問題は複数にわたることが少なくないので、子育て支援での気づきと発見を串刺しで地域の活動へとつないでいくことが求められる。十人いれば十人の子育てニーズがある。サービスが縦割りなので窓口を一つにしたワンストップの総合的な支援が求められてきている。



#### ◇パネリスト：伊藤 仟佐子さん 『仙台市子育てふれあいプラザ のびすく仙台』

震災後 4 日目に開館。人・情報・物など予想以上にたくさん集まり、予定になかったことにも取り組んだ。母親たちは震災直後、話しを聞いてくれる人を求め、話をすることで安心した。子どもたちは震災に遭った場所である家は不安な場所となり、のびすく仙台は遊んでいた場所だったので安心して遊び、笑う姿が見られた。保護者もその姿を見て喜び、ひろばが日常を取り戻せる場となった。“ひろばがいろんなこと、何でもできる場所” だと感じた。



震災時、母親は子どもを必死に守り頑張ってきた。しかし 3 ヶ月後には頑張りの糸が切れてイライラし、子どもを怒鳴り気持ちを抑えられなくなった。6 ヶ月後には震災の話ができなくなっていった。被災の状況の違いや同じ話題でも感じ方は人それぞれ。時間の経過とともに、保護者の心が見えなくなったので、怖くて話ができなくなった時期があった。家族の多様化・問題を抱えている家族の心が見えない状況だと、どんな支援が必要なのか・できる支援は何なのかが分かりにくく難しい。震災を乗り越えて学んだことは、通常のひろばの運営・ひろばを守る、そして基本に戻ることの大切さ。また、“つながり”の必要性。普段からの顔の見える関係性がいざという時の助けになること。震災後、新たに取り組んだことは、ひろばに来られない母親への支援。地域の母親たちの力を活用し、支援者としての役割を担ってもらうことで支援の裾野を広げる活動を行っている。また、晩婚化・高齢化にともない育児をしながら介護（ダブルケア）をする母親が増えているため、その実情を知ってもらい、新たな取組みを進める。

## ◇パネリスト：奥山 千鶴子

震災のことを忘れずに、また現地のことを知ってもらいたいことから仙台の開催につながった。当時の0、1歳児は現在小学校1年生となり育ちが心配と言われている中、改めて親子の居場所の意味を考えたい。被災地だから顕在化する部分があると思うが、日本全国どこにおいても乳幼児の育ちには、子育て家庭の安心感がまずは一番大切である。そのような認識で、子育てひろばは、0、1歳児乳幼児家庭、多様な家族に対応できているのかが問われていると思う。

人口の減少により、男女共に働く社会となる。少子化の歯止めは難しい中で、家族を応援するとはどういうことなのか。地域子育て支援という言葉ができて20年。この20年（1994～2014年）で「結婚・子育ての変化」は、晩婚化・高齢出産が顕著。「働き方の変化」として共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回ったのは1992年。男女共に働き方を変えていき、母親のパート就労が増えている。そして保育所や認定こども園でも子育て支援を行う時代となった。保育所の利用率は1、2歳時で38%。3年後には40%に達するのではないかとされている。そのような中で、地域子育て支援拠点事業の意味を改めて考えなくてはならない。

地域子育て支援拠点事業計画の目標はH31年度で7,815ヶ所、中学校区に1ヶ所が目標となる。そろそろ地域子育て支援も評価指標をしっかりと共有していかななくてはならない時期に来ているのではないかと。

利用者支援事業は、H31年度で1,843ヶ所。2/3は基本型（母子保健型は含まれない）を目標にしている。震災で顕在化したように、子育て家庭をサポートするネットワークや地域の力、ソーシャルキャピタルが豊かであればならない。親が必要としている時に安心して何でもできる柔軟なかかわり、安心を提供する為に、顔の見えるつながりをつくって未来に向けて共有できたらと思う。



## ◇コーディネーター：渡辺 顕一郎さん

人口減少時代をどうやって生きていくのか。男女問わず働くことが必要となる。その為には、女性が働きやすい環境と保育が必須となり待機児童ゼロが求められる。拠点ができることと、できないことをアピールしていくために、居場所をつくり個別支援・家族支援・地域支援を一体的に進めることが求められてきている。また、子育て家庭から求められる支援が変化してきているので地域子育て支援拠点の実践の見直しをしていくことが大事。

親は自分の生活が大変な時、子どもが必要としているケアが十分にできなくなる。0～1歳児の低年齢児の子育てに困難を抱えている場合、家族機能が低下し虐待等の問題の要因となったり、子どものその後の発達にも影響を及ぼすこともある。0～1歳児が集中し、じっくり遊びこむためには拠点のハード面にも目を向け、コーナー、ゾーンをつくって区切るなど、子どものかかわりだけではなく環境づくりも大切。子育てひろばでできることはもっとあるので、ひろばの環境やスタッフのかかわりなどの実践を積み重ねていくことが重要。



## ■主催者挨拶

奥山千鶴子（NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長）



## 《2日目 分科会プログラム》

### ■第1分科会

#### 子どもの豊かな育ちを育むひろばの環境づくり

【コーディネーター】松田妙子さん（NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事）

【話題提供】齋藤勇介さん（NPO 法人子育て応援団ひよこ 理事長）

村山恵子さん（NPO 法人クリエイトひがしね 事務局長）

子育て・親育ちを地域で支え合うことのできる信頼の輪を育み、安心して子どもたちが自らの経験を通じて「生きる力」を育むことのできるひろばの環境づくりについて考えた。5テーブルに分かれ、話題提供者からのお話とグループでのワークを交互に行った。意外な設問もあったが、話を引き出すのが上手なコーディネーターの力で参加者の皆さんはあっという間に集中して話し合いに参加していた。

#### ◇コーディネーター：松田妙子さん

ひろばが親支援なのか、子ども支援なのかという議論はあるが、両方を地域で支え合う信頼の輪をつくっていくことが大切。少子化で子どもに構い過ぎる大人が多くなって、子どもの自由な遊びが制限されている。子どもたちが自らの経験を通じて「生きる力」を育むことができる環境づくりが大切。大人がじゃまをしない。



#### ◇話題提供：齋藤勇介さん

平成23年2月名取市でNPO法人子育て応援団ひよこを設立。法人の理事長として児童センター、放課後児童クラブ、子育てひろばの運営等に従事している。

キーワードは「笑顔」。ホットできる居場所を提供したい。たくさんの笑顔を見たい。そのために、ひろばとして行事を第一に考え、実施していくことが大切なのではなく、何気ない日常を大切に積み重ねていくことで子どもの笑顔、親の笑顔、支援者の笑顔を育んでいきたいと考えている。与える支援からつながりを育み、お互いが関係し合う支援にシフトしていくべきである。そのために、あえてノンプログラムで行っている。指示が多いとほっとできない。自分たちで気づくことができる環境づくりを心がけている。

小さい時期に子どもの育ちに必要な要素に、「教育」と「遊育」がある。特にひろばは「遊育」の視点が大切である。大変なことも多いが子どもにとってどれだけ遊びを通じた経験が重要であるか、子どもの視点に立ち、大人が子どもの遊びを奪うことにつながらないように考える。まずはやってみよう。できない理由を考えるのではなく、失敗してもいいからやってみようという風土づくり。一生懸命な大人の背中を見せていこう。



#### ◇話題提供：村山恵子さん

平成17年4月から山形県東根市で室内のさくらんぼタントクルセンターを運営している。転入転出者が多い。毎週年齢別サロンを開催。利用者を巻き込んだ事業展開を行っている。平成25年5月からは屋外のひがしねあそびあランドを運営している。プレーパークになっている。里山などにも出かけて地域の方と一緒に活動を行っている。



子どもたちは大人が思いもしない遊びを発見する。自由な遊びの中でリスクとハザードに分けて考えてみることも必要である。これまで大切にしてきたことは、それぞれのペースにあわせた成長を支えること。異年齢の子どもが集まることでやっかいなことも多いが、ドラマも多い。

日々の活動のふり返りが大切。それを通じていろいろな視点があることに気づく。その気づきが次につながる。行き詰まったとき、何のためにやってきたのか原点に戻る。やってあげることにはきゅうきゅうとならず共に育ちあえるスタッフになりたい。

ひろばやプレーパークが異空間になってしまっている。それも悪いことではないがその良さを地域にひろげていかなければならないと感じている。

◇グループワーク

- ①話題提供者の話を聞いて心に残ったキーワード、思っていることと自己紹介
- ②豊かな育ちにつながるひろばでやってみたいこと、やっていること100のアイデア
- ③お互いに見合って、「いいね！」シールを貼ろう
- ④アイデアを実現するためには何が必要かについて話し合った



松田妙子さん

その場をつくりつづけていくためには「別の頭」が必要。日常とのバランスをとりながらチャレンジしていく。小さなことから始めよう。

村山恵子さん

自分たちのひろばの実践が町の中にしみ出して、いたるところで始まればいい。

松田妙子さん

どんな遊びが、子どもの成長を育むのか？実践を積み重ねていくからこそ生まれる新たな専門性に着目していこう。



《100のアイデアの一例》

朝ご飯タイムをつくる	親子スタッフでおもしろいものをつくってみんなで食べる	コーヒータイムを設けたい	カフェ・食事が安く提供できる(90品目)	立ち飲みコーナー	お下がりボックス	お下がり会	リサイクルの日	授乳室での交流会	呼ばれたい呼び名で名札をつくる
ランチ会	お世話様です。昼ご飯の幅を長くする	ママのティータイム(お好みのカップを選ぶ)	お茶のみ		預け合い	おたすけスタッフ異年齢交流	子連れスタッフ	助け合いワーク	双子ちゃんの無料サポート
おすすめスポットを数えたチラシ	ミニコミ誌へどんどん宣伝する	テレビの情報番組に親子でとんとん登場	パパの時間をつくる		ミニ託児つきおしゃべり会	幼稚園ママによる託児	物干して日よけをつくる	地域探検の日	足湯
お父さんの日	お父さんごっこの日	パパたちと飲み会	お父さん用のサロン	お父さん向け漫画をおく	絵本ママが読み聞かせ	絵本中学生がボランティア	親子のお昼寝コーナー	ママ会議	お母さんたちの声集めリフレッシュコーナー
関西弁をしゃべる会	転入・転出サポート	ハンモックで遊ぶパパと			クリスマスパーティーおしゃべりして出掛けよう	趣味のママ講座	先輩ママとのアイデア交換会	ママたちのマラソン大会	手作りおもちゃキットづくり

## ■第2分科会

### 産前産後からの切れ目のない家庭支援と地域子育て支援拠点事業

【コーディネーター】野口比呂美（NPO 法人やまがた育児サークルランド 代表）

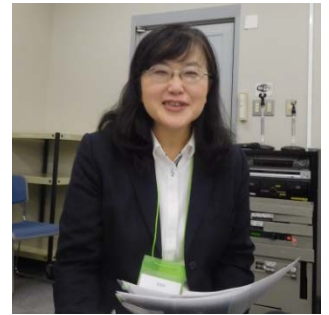
【講師】塩野悦子さん（宮城大学看護学部 教授）

【話題提供】森田圭子さん（NPO 法人わこう子育てネットワーク 代表）

地域や地域子育て支援拠点事業で産前産後の親子をどのように支えることができるのかについて、講義と拠点での活動事例を聴き、グループワークで全国各地の情報を交換し課題について話し合った。

#### ◇コーディネーター：野口比呂美

妊娠、出産は人生の最も重要な出来事の一つで、本人だけでなく子どもの発育や児童虐待にも影響があるといわれている。産院を退院直後は孤立しやすく支援の手が届きにくい時期でもある。親子を必要な支援につなぐために、妊娠期のアプローチやアウトリーチなど、拠点の機能を十分に活用して産前産後からの切れ目のない支援について考えたい。



#### ◇講師：塩野悦子さん 「地域で支える産前産後支援のあり方 ～助産師の立場から～」

昨年、なかなか泣き止まない生後4ヶ月の我が子に母親が手をかけてしまうという悲しい事件があった。二度とこのようなことが起こらないようにどうしたら良いだろうか？

まずは、妊娠期から母親を孤立させないような取り組みが大切であろう。そのために重要になってくるのが、「母親自身が社会に守られているという感覚をもてること」である。社会全体が産前産後の女性の心身の脆弱さを理解し、周囲の人々が個々に支えるのではなく、つながりを持ちながら妊娠期から育児期まで一貫した寄り添いを行うことが欠かせない。同時に、産後の現実を見通せる関わり、産後の女性を癒す関わり、母子を支える家族の力を高める関わりを行うことも重要である。このような関わりを、母親の個性



#### 結論 —産前・産後支援のあり方—

- 母親が社会に守られているという感覚
  - ① 妊娠～育児まで一貫した関わり(寄り添い)
  - ② 産後の現実が見通せる支援
  - ③ 個性に適した支援方法
- 家族への啓蒙「子育てママの支え方」
- 新・産後ケア文化の構築
- 支援関係者が互いにリスペクトする

<当日投影PPTより>

に適した形で、切れ目のない状態で行うことが最も重要になってくる。医療現場では社会的リスクや精神障害を抱えた妊産婦などに時間を割くことは多いが、そこで見過ごされがちな一見問題のなさそうな母親も不安を抱えている。そういう母親に寄り添うことのできる子育て支援の場は、母親の拠り所になっている。各機関が連携することで、母親を孤立させない、切れ目のない支援への取り組みができるのではないかな。

#### ◇話題提供：森田圭子さん 「産前産後からの切れ目のない家庭支援と地域子育て支援拠点事業」

もくれんハウスは子育ての負担感、孤立感など自分たちが困っていることが出発点となりスタートした。常に当事者として必要だと感じたことを、活動として取り入れてきた。ひろばは、家族の孤立を防ぐだけでなく、親が知識を得てエンパワメントされ、自身の子育ての捉え直しができるような、子育ての自立を支援し、家族課題の解決力を育てる場にもなっている。一方、ひろばを運営する中で、ひろばに来ない親子、養育支援家庭訪問の対象にはならないが気になる親子など支援が届いていない親子





に対し、住民参加（支え合い）型の家庭訪問型子育て支援の必要性を感じた。そこで、ホームスタートの活動に取り組み、非専門家だからこそできる気持ちに寄り添う支援を行っている。その中で妊娠期の辛かった声をたくさん聴くことになった。支援資源のない妊娠期に目を向けることで、課題の深刻化を防ぐことが出来るのではないかと考え、ホームスタートを産前から拡大することも試みている。また、わこう版ネウボラと連携し、子育て世代包括支援センターとしての事業も行なっている。その中で家族の個別課題を他業種・他職種と共有し、一緒に解決に向け動くことが出来るようになった。官民協働、公助共助で支援をすることで、より多様な支援を行い、支援の隙間を埋めて産前産後からの切れ目のない支援を行なえるのではないかと考える。

#### ◇グループワーク

グループ毎に、自己紹介と活動紹介のあと各地での妊婦向けの事業について情報交換し、切れ目のない支援において拠点ができることや課題、登壇者への質問や更に聞きたいことを出し合った。

6つのグループで共通に課題として挙げたことは、「行政とどうつながれるか」と「妊娠期にどうアプローチするか」であった。

まず、行政とどうつながるか、どのように信頼関係を築いたのかについて、森田さんよりこれまでの経験からお話があった。

行政機関の信頼を得られたのは、利用者支援を行ってきた実績や社会資源を作ってきた実績を積み重ねてきたことが大きい。地域のニーズを行政よりも早く知り、必要だと思ったことを、質を担保した活動としてねばり強く続けることで、信頼関係ができてくるのではないかと考える。また、何よりも「地域の中での信頼関係づくり」が大切である。地域での実績が信頼につながっていくと考える。味方をどれだけ作れるか、活動の周知や連携への働きかけを途切れなく行うことも大切である。

次に、妊娠期へのアプローチの仕方として、塩野先生から次のようなアドバイスをいただいた。妊婦向けの事業は初めからたくさんの参加者があるわけではない。ある程度時間はかかると思う。口コミを利用し、良さそうだと思ってもらえるよう地域や先輩ママとのつながりを打ち出すなどして、子育て支援の場としての強みを活かす取り組みをするのが良いのではないかと考える。周知活動においても、チラシの設置をしてほしい場所のゲートキーパー（産婦人科の師長さん等）に話しを持っていくこと、管理者にメリットを話すことができるようにすることなども念頭に置いて活動してみてはどうか。あきらめずに何度もノックすることが大切である。

#### ◇コーディネーター：野口比呂美

子育て世代包括支援センターは、センターという言葉から“ハコもの”をイメージされることが多いが、その意味するところは、体制づくりやシステムである。医療、母子保健分野と地域子育て支援拠点が連携することで「切れ目のない支援」が実現できる。拠点は、良いことも悪いことも何かあったらいつでも来られる貴重な場所だ。産前産後の支援について、拠点が果たす役割に対し期待が寄せられている。



## ■第3分科会

### あらためて地域子育て支援拠点の4つの基本を考える

【コーディネーター】中條美奈子さん（認定NPO法人マミーズ・ネット 理事長）

【助言者】渡辺顕一郎さん（日本福祉大学 教授）

【話題提供】小磯厚子さん（おひさまひろば 副代表）

菅原佳奈さん（秋田県横手市子育て支援センター 指導員）

#### ◇コーディネーター：中條美奈子さん

今回は、基本4事業に絞って話してもらおう。4事業に焦点を当てて拠点の役割を振り返ることで、地域や集まる親子のニーズを反映し、拠点事業を運営していくことができるようになってほしいと思っている。交流の機会や気づきが広がるようワークの時間も入れてみた。小グループで存分に話してもらいたい。



#### ◇助言者：渡辺顕一郎さん

地域子育て支援拠点の制度上の位置づけとして、基本4事業の確認を行い、それらの捉え方を紹介する。



#### ◇話題提供：菅原佳奈さん

平成24年4月から、横手市子育て支援センターで指導員として勤務。来所された親子の気持ちに寄り添った子育て支援を心掛けている。

##### ①親子の交流の場の提供と交流の促進について

0歳児、1歳児、2歳児以上の3クラスに分け、様々な行事を行っている。「はじめまして会」では名刺交換のように自己紹介カードを交換し合う。センター内での活動だけではなく外での活動も多い。秋田県横手市は車社会で電車を敬遠する保護者も多いためか「電車でおでかけしてみよう！」というイベントは盛況であった。その他、プレママデーを設け産前からの交流をすることで、産後も気軽に遊びに来られるような活動を行っている。



横手市では祖父母との同居家庭が多く、祖父母は子育て支援センターより「公民館」に馴染んでいるため、公民館に出向いてセンターの紹介をしたり、交流できる子育てサロンを開催したりと親子だけでなく世代間交流も行っている。

##### ②子育てに関する相談・援助の実施

テーマを設けて話し合ったり、フリートークをしたりと気軽に情報交換が出来る場「mamaトーク！」はママのロコミが広がり賑わっている。

##### ③子育て関連情報の提供

毎月1回おたよりを発行し、広場会員や地域内の幼稚園に配布している。また、子育て情報サイト「はぐはぐ」には乳幼児の検診情報や、行事予定、行事の様子等を掲載している。

##### ④子育て支援に関する講習

子育てのヒントや活力になるような講座を開催している。子どものヘアアレンジや、幼稚園のグッズを作る講座など、ママからのリクエストで内容を考え、子育て中のママ自身が講師として活躍できる講座となっている。

## ◇話題提供：小磯厚子さん

2004年おひさまひろばの立ち上げ時からのスタッフとして参加し11年目。

### ①親子の交流の場の提供と交流の促進

「壁の花」は、良いイメージは無いかもしれないが、私たちスタッフは壁の花になっている。ひろばに入って、利用者に背を向けるのではなく、壁を背にしてひろば全体を見守る。そして、言葉をかける。大変な時はスタッフ同士のアイコンタクトが出来るようなチームワークを形成している。

### ②子育てに関する相談・援助の実施

月に1回、専門家による相談日を設けており、スタッフによる傾聴は勿論のこと、利用者同士で支え合うピアサポートも行っている。相談を持ちかけられた時に、周囲に居る親に「あなたはどうかだった？」と聞く事で、対処方法の選択肢を広げる事が出来る。

### ③地域の子育て関連情報の提供

地域の子育て支援情報の収集と情報提供の場として、支援側にも利用者側にも活用して貰っている。利用者同士の情報交換掲示板等も活用されており、自由にお知らせを貼れるコーナーも設置されている。

### ④子育て・子育て支援に関する講習の実施

月に1回以上、子育て及び子育て支援に関する講習等を実施している。母親同士のつながりや、母親自身のことからつながる企画をしている。その講習やセミナーは、母親だけで参加できるセミナーもあり、託児もできるようにしている。

母親が活躍できる場の提供と勉強会&活動報告会などで、各々の持つ経験や知恵を共有する事で充実感や満足感を得られ、関係が深まり、更にその後の活動にも繋がっている。



## ◇助言者：渡辺颯一郎さん

『子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく。すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程である。(保育所保育指針より)』

何度も、何度でも読み返して欲しい。子どもの社会性は、子ども同士の交流や、家庭以外の地域の人たちとの交流、かかわりなどを通して養われる。

幼児の場合、おもちゃの取り合いなど、要求の対立やいさかいごとがしばしば起こってくる。しかし、それは成長において当たり前の事で、このような体験を通して、共感性が養われ、相手のことを思いやって、むやみに手を出さない事を悟っていく。親も時には我慢して、子どもを見守る必要がある。

子どもの育つ環境作りとして、ひろばの中にゾーンやコーナー作りの工夫が大切である。これらを設置する事で、子どもはじっくり遊び込む事が出来る。また、子どもの行動を抑制する事が少なくなる。大人にとっても居心地の良い環境になる。

#### ◇グループワーク：ワークシートを使ったワークショップ

自らの基本4事業を記したワークシートを回し読みし、その内容について話し合う。



#### ◇質疑応答

Q ひろばの中に、地域の年配女性がボランティアで見守りして下さっているが、

子どもを叱ると、利用者に変な不評だった。ボランティアをお願いする時、他のひろばではどうしているか？

A 育児の世代間ギャップを埋めるため、ボランティアの講習をして、実際に見守りの様子を体験していただくから、ボランティアとして登録していく形を取る等、時間をかけて信頼関係を築く。

Q イベントの託児について、どのようにしているのか？イベント用の託児室を設けているのか？この際の託児は、有料か、無料か？

A ひろばの広さ、運営によって決まっていくので、それぞれのひろばの考えがある。

#### ◇助言者：渡辺 顕一郎さん

「同質性の緩和」をひろばの中に求めていきたい。

ひろばの利用者は、「小さい子どもとお母さんだけ」の他者を受け入れられない雰囲気があるのではないだろうか。男性をはじめ、高齢者、シングルマザー、障がい児を抱える人、色々な人が気軽に入れる雰囲気の持てる「ひろば」になると、子どもの発達に関しても好ましい影響がもたらされると考える。



## ■第4分科会

### 子育て家庭を支える拠点における利用者支援事業

【コーディネーター】坂本純子さん（NPO 法人新座子育てネットワーク 代表理事）

【講師】橋本真紀さん（関西学院大学 教授）

【話題提供】有澤陽子さん（NPO 法人子育てネットひまわり 代表理事）

原美紀さん（横浜市港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長）

#### ◇話題提供：有澤陽子さん

NPO法人子育てネットひまわりは、2004年に「子育てサロン」として開設した。現在は子育て支援拠点事業や利用者支援事業を受託。自身は、2013年より地域子育て支援コーディネーターとして活動中。

高松市では、2013年11月より4拠点4団体で利用者支援事業を始めている。

コーディネーターが利用者支援をしていくにあたり、行政の側面的な支援を得て、地域で顔の見える存在として活動をしている。4拠点4団体での利用者支援を行うことで、利用者は各団体の個性をあらかじめ理解して相談先を選択することもできる。

また、母子保健との連携も始め、4ヵ月児相談の場を訪問し、親子の待ち時間を利用した声掛けを通じ必要に応じた個別対応を行っている。コーディネーターは、保健師との役割を明確化しながら、相談内容によっては保健師から引き継いだりと、情報の共有化を図っている。

コーディネーターは、持ち込まれる相談に対応するだけでなく、相談に来ることが出来ない方への支援活動もしている。支援を必要とする親子や家庭に気づき、どんな支援が必要か発見し、排除しない関わりを継続することが大切である。地域子育て支援コーディネーターという責任と意識で活動をしている。



#### ◇講師：橋本真紀さん

支援の対象家庭は、要保護家庭、要支援家庭、「心配な」家庭、一般家庭に区別される。どの家庭にも支援が必要ではあるが、注意していくのは拠点で出会う「心配な」家庭である。当事者本人は、子育てに漠然とした不安を持ちながらも、支援を受けられることに気付かない、又、相談することを思いつかないでいる、少しのサポートによって当事者の力を発揮できる可能性がありながら、支援の手をさしのべることができない家庭がある。

支援の基本姿勢として6つが考えられる。①支援の主体は利用者であること、②個別のニーズに合わせた支援を行うこと、③早期の予防支援、④子どもの育ちを見通した継続的支援、⑤子育ての背景にある様々な困り感を視野に入れる包括的支援、⑥地域ぐるみでの子育て支援が必要である。利用者支援事業は、個別のニーズを見極めて支援へ繋がる「利用支援」と地域の支援資源へ働きかけ、繋がる「地域連携」から成り立っている。

拠点での利用者支援事業は、当事者の身近な生活の場において信頼関係にある拠点スタッフがニーズを見出し、当事者の生活のルーティーンの中で繋がれる場を作れる利点がある。



#### ◇話題提供：原美紀さん

NPO法人びーのびーの運営を2000年より行っている。2006年の横浜市次世代育成支援行動計画において、1区目モデル事業として、びーのびーの運営の地域子育て支援拠点「どろっぷ」を開設。2016年1月より、横浜市18区全拠点で利用者支援事業を開始予定している。

事業開始にあたり、個別支援と地域支援はセットである事が、基本型の生命線であると考えている。

「場（＝支援拠点）」が地域にあり、利用者が身近な「場」にいるスタッフを相談者として選んでいる。その利用者の意思を尊重することは、利用者支援事業の基本姿勢の「利用者主体の支援」にあたる。日常生活の「場」だからこそ、利用者の多面的な事情を拾える可能性もあり、顔の見える関係性を大切にしていきたい。

一方で、利用者の個人の意思を尊重しながら、場のスタッフからコーディネーターである専任職員にどう繋ぐか、支援をする側の役割分担が課題となっている。

利用者支援事業においては、当事者が主体であり、支援者は仲介者であり、代弁者であり、組織化する人でもある。

今までの拠点支援事業で獲得した、場における関係性や地域との関係性の基盤の上に始まる利用者支援事業に大きな期待をしている。



#### ◇コーディネーター：坂本純子さん

親子に寄り添う利用者支援においては、切れ目のない支援が求められている。地域の中で支援を切れ目なく行うことは、大変な作業である。利用者支援事業とは、1つの質問に1つの答えを出すことだけではなく、1つの家庭の、子育てという人生の一時に寄り添い、課題解決に向け共に考えていくことである。覚悟の必要な仕事ではないだろうか。



## ■第5分科会

### ひろばがになう多様な困難を抱えた子育て家庭への支援

【コーディネーター】奥山千鶴子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長）

【話題提供】村井琢哉さん（NPO 法人山科醍醐こどものひろば 理事長）

小川ゆみさん（仙台市子育てふれあいプラザのびすく 泉中央 副館長）

#### ◇話題提供：村井琢哉さん 「子どもの貧困についての取組みについて」

京都市山科地域に住む全ての子どもたちが心豊かに育つことを目的として、設立から今年で35年目を迎えた。いま、伝えたい事がたくさんある。子どもの貧困は親の貧困である。今を生きている子どもたちに対して、今困っていることを、今解決しなければならない。日本では、6人に1人が相対的貧困であり、子どもの貧困数は55万人と言われる中で、社会ではそれを拾っていない現状がある。さらに、日本では貧困の高齢者が増加し、子どもから高齢者まで切れ目なく「貧困」が続いている状態である。



また、貧困には虐待が密接にかかわっている現状も忘れてはならない。経済的貧困により、当たり前の生活習慣が身につけていない児童が、社会の中で違和感を持つことになる。当たり前のことを親に代わってサポートする事が必要である。また、貧困世代が様々な大人のモデルと出会う事は非常に難しい。違和感を感じたら、すぐにアクションを起こすことが大切だ。小・中学生のサポートプロジェクト、ケースワーカーとのケース会議等を行ない、ボランティアが中心となって活動している。年間200人のボランティア登録がある。地域と一緒にやっていかなくてはいけない。今、困っている子どもたちを支えることは、地域の未来をつくることである。そして、地域の未来をつくっていくことは、将来の日本の姿を変えることである。

#### ◇話題提供：小川ゆみさん 「震災後のひろばの現状と取組みについて」

震災から4年が過ぎ、この4年間は仕組み作りの4年間だった。震災後、宮城県沿岸部や福島からの親子がひろばに増えてきた。ひろばがある仙台市泉区は、もともと虐待のケース数が少ない地域であるが、震災後はそうではないと感じた。母親への支援と子どもの心のケアを並行して行ない、顔を見て話すことの大切さ、場所があることの重要性を認識した。ひろばの中で、子どもがかわいいと思えない、みんなは上手くできているのに自分は出来ない、眠れない等の孤立しがちな親子と直面し、法人の独自事業「COCO ニール」や「ママのきもちトーク」を展開した。無料託児を付けて、母親グループへの参加を促し、効果を得た。母親グループに継続的に参加する事により、自分は自分で良いんだという自己肯定感が育まれてくるという効果がある。大事なことは、マイナスの感情を評価せずにまるごと受け止めることであり、その場が守られ安心であるということだ。また、訪問事業も展開し、ひろばに出てこられない家庭を訪問する事により、子育て家庭の底上げを実施してきた。



同時にボランティアの育成にも力をいれてきた。地域のボランティアを育成する事により、子育てしやすい街作りや地域を巻き込んでいくことで、子育て世代が住みやすい環境と孤立を防ぐ取組みを行なっている。母親が自ら望んで孤立から抜け出したいと思えるような「安心できる場所」をつくるのが大切である。

◇コーディネーター：奥山千鶴子

一日目で共有した、子どもたちの見えない心の部分をどのようにサポートしていけば良いのか、ひろばが担う多様な困難を抱えた子育て家庭への支援についてお2人からヒントをいただいた。乳幼児期の家庭についても、違和感を感じたらアクションをすぐに起こせるよう、また親たち自らが孤立から抜け出せるよう「安心できる場所」として、地域子育て支援拠点で出来ることはたくさんある。今後も実践に生かしていきたいと思う。



パネリストの発表後、各々10分のグループトークを展開。

日本全国から集まった支援者同士の交流を持つ各ひろばの悩みの共有や様々な取組みについて、活発な意見交換が行なわれた。

地域資源・社会資源を発見し、一步また一步、明日からひろばで出来ることをしていこう。





## ■第6分科会

### 地域子育て支援拠点における被災家庭への支援

【コーディネーター】伊藤任佐子さん（NPO 法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク 代表理事）

【話題提供】荒木裕美さん（NPO 法人ベビースマイル石巻 代表理事）

伊藤昌子さん（NPO 法人きらりんきっず 代表理事）

富田愛さん（NPO 法人ビーンズふくしま 事業長）

震災時の状況と取り組み、今の活動について、3団体の事例を聞き、その後4グループに分かれ、課題や必要な支援について意見交換を行った。

#### ◇話題提供：荒木裕美さん 「石巻の現状と活動」

ベビースマイル石巻は、震災2か月後に、子育て中の母親が中心になって立ち上げ、現在石巻市の委託により、マタニティ・子育てひろば「スマイル」の運営を行っている。被災直後、乳幼児を抱えた多くの方は、避難所は開設されたものの、親戚等に身を寄せた人が多く、それぞれの避難先が把握できず、支援物資が届かない現状があった。支援物資の受け入れと同時に、様々な情報をいかにして届けるかに苦心した。

遊ぶ場所もなく子どもの居場所が必要と考え、借りられる場所を見つけ「ひろば」を開催すると、乳幼児を抱えた沢山の親子が集まってきた。

「ひろば」には、疲れ切って不安と闘いながら子育てをしている母親の姿があった。安心できる場では母親同士、子ども同士が繋がることでいきいきとした交流が生まれ、お互いに支え合う育ちの場の大切さを痛感した。

ひろばの役割には、「ひろばと繋がっていれば、何があっても大丈夫」と思える安心できる場所、震災の経験と学びを命の大切さと共に伝えていく場所、妊婦や子育て家庭の視点を復興のまちづくりに届けること、行政や医療、地域と平常時から連携した繋がる場所という4つのことが挙げられる。これからは新たなコミュニティの分断による孤立を防ぎ、継続的に子どもたちを見守り、ひろばを通じて笑顔いっぱいのまちづくりを実践していきたいと考えている。



#### ◇話題提供：伊藤昌子さん 「陸前高田の現状と活動」

震災前年の7月に、子育てと地域活性化の拠点として開所した「ひろば・きらりんきっず」は、開所後わずか8か月で被災し、その1か月後に、避難所となった中学校の図書館で再開した。親子がほっとできる居場所を心がけ、物資を提供したり、おしゃべりが情報源となり、支援者自身も被災者なので、私たち自身にとってもほっとできる居場所となり居場所があることに助けられた。震災前から陸前高田の子育て支援の取り組みは遅れていたうえ、震災後人口減少がさらに加速した。陸前高田は、市全体が被災し、ふるさとがなくなった感じがして言葉を失った。3キロにわたるベルトコンベアにより12.5mの盛土でかさ上げされ、徐々に復興が進んではいるが、まだまだ子育て支援には手が回らない状況にある。周りを見渡すと何もなくて夜は真っ暗。公園の減少で慢性的に子どもたちは運動不足、子どもの施設も何一つできていない。地域には、がれきの山がまだまだいっぱい、仮設住宅で暮らす人も多く、「きらりんきっず」は唯一笑顔になれる場所だった。中学校の図書室、仮設店舗に続き、活動場所が転々とする中で、3か所目では、震災によって父子家庭が増えたことから本格的に父親支援を始めた。今後の課題は何をおいても復興再建だが、将来を担う子どもの笑顔のため地域に求められる居心地のいい場所づくり、地域に子育て支援の「わ」を広げる活動を続けていきたいと考えている。



## ◇話題提供：富田愛さん 「福島の実況と活動」

「ビーンズふくしま」は、不登校や引きこもりなどの支援から始まったが、震災後は、仮設住宅で暮らす子ども達の支援や、原発事故の影響で避難生活を続けている親子の支援にも取り組んだ。福島では、原発の被災でふるさとはなくなりながら帰れない状況が続く一方、帰れる状況になったとしても、将来の子どもを考えると帰らない家庭も非常に多く、それぞれの選択が父母の肩に重くのしかかっている。支援活動としては、「県外に避難している母親」から、今の状況に対する怒りや悲しみを聴く中で、避難先にあるひろばや交流会の存在を紹介した。また、家族が離れて生活し、ストレスを抱える親子や避難先から帰還した親子の集いの場として「ママカフェ」を開催した。ひろば全協の繋がりを活かし、各地で連携団体になってもらい交流会を開催したり、福島県内各地でママカフェを開催した。「ママカフェ」を大事にしつつ、さらに少し広げて、すべての親子、若者、地域の大人を含めた多世代の居場所として「みんなの家」がオープンした。いろいろな人の思いを認め合い、自分らしく安心して過ごせる場、ホッと出来る安全な場として「みんなの家」での支援活動を継続していきたいと考えている。



## ◇グループワーク：4グループに分かれて話し合い

<A>「つながる」をテーマに、自分で行動を起こしてお互いに出し合うこと、拠点が楽しいと思うところであってほしいこと、音楽で繋がり、イベントや勉強会などを通じた地域での繋がり、移動しても繋がることの大切さなどが話し合われた。

<B>地域の大小によってネットワークや繋がりが違い小規模の方が繋がりやすく災害時や緊急時も役に立つだろう。自分の子どもを守るにはネットワークをどれくらい持っているかで支援の差が出る。個の力、日ごろのセーフティネットを張っておくことが大事。困ってからでは遅いので平常からネットワークを持つことが大切である。

<C>事前に行政と繋がっていて顔が見える関係にあると、いざという時に支援がスムーズにできる。被災地の大変さをもっと全国にアピールすべきだ。福島のこと被災地のことを知らなすぎる。現実を伝えることが大切だ。対話や話し合いは必要だが、本当に大変だとテーブルにも着けない。本人が言えない時は誰かが代弁することも大切だ。

<D>本当に支援が必要な人を呼び込むにはどうしたらいいか。支援を受けたがらない人には継続的なアプローチが必要。傾聴に徹すること、支援者だけが頑張るのではなく利用者との相互関係を結んでいく。人は人でなければ支えられない。災害はいつ起こるか分からないので日頃からの準備と子育て支援も全国レベルで繋がるのが大切である。

## ◇コーディネーター：伊藤仟佐子さん

支援者だけれど自らも被災者でもある。それも忘れてがむしゃらに休みなしで働いてしまう。休むのが怖くなる。これは多くの被災した支援者が感じたこと。拠点を守ると同時に、支援者としては、きちんとセルフケアをして、休みを意識し無理をせず活動することが大切である。被災した現地にはいろいろな人がやって来る。中にはボランティアと称して傷つける人も沢山やってくるし、そこを見極めなければならない。支援を受ける側は与えられるままに受けとるのではなく、受けとる力「受援力」が必要だということを今回の震災で学んだ。



